

ドードーツリー —鳥と植物の共生—

筑波大学教授
サイエンスライター
渡辺 政隆

ほんとうのドードーを捜して

アリスが迷い込んだ不思議の国の住民として登場したことで、ドードーは不朽の存在となった(図-1)。この作品で描かれなかったとしたら、ドードーのことを知っている人がどれほどいたことか。いや逆に、ドードーなる妙ちきりんな鳥は完全にファンタジーの世界の存在と信じている人のほうが多いかもしれない。

ドードーは、インド洋に浮かぶモーリシャス島にかつて実在していた飛べない、体重が10キロはあったというハト科の大型の鳥である。しかし、オランダ人入植者による乱獲や持ち込まれた家畜やネズミのせいで1680年前後に絶滅してしまった。

『不思議の国のアリス』(1865)にドードーが登場したのは訳があった。作者ルイス・キャロルことチャールズ・ドジソン(1832-1898)は、オックスフォード大学の数学講師だった。その自然史博物館は、ドードーの骨を取蔵していたのだ。しかも吃音だったドジソンは、自分の名を口にするときに「ドードー、ドジソン」と発音しがちだったこともあって、ドードーにことのほか親近感を抱いていたといわれている。

『不思議の国のアリス』のオリジナル挿画を描いたジョン・テニエル(1840-1914)がドードーを描くにあたって



図-1 ジョン・テニエルが描いた挿絵



図-2 ルーラント・サーフェリーが1626年に描いたとされるドードー。現在は大英自然史博物館に収蔵されている。

参考にしたのは、オランダの画家ルーラント・サーフェリー(1578頃-1639)が1626年に描いた絵だった(図-2)。この絵は、イギリスの鳥類学者ジョージ・エドワーズ(1694-1773)



図-3 オックスフォード大学自然史博物館のドードー展示(筆者撮影)

が所有していたことから「エドワーズのドードー」と呼ばれている。デブっとしていていかにも間抜けな飛べない大きなハトというドードーのイメージを定着させたのが、「エドワーズのドードー」だった。

サーフェリーは、1604年に神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ二世の宮廷画家となり、1612年の皇帝の死までプラハで働いた。おそらく、皇帝の博物コレクションにドードーが含まれていたのだろう。サーフェリーは、「エドワーズのドードー」を含めて6点のドードー画を残している。

現在、ドードーの剥製は一つも残っていない。知られていた唯一の剥製は、前述のオックスフォード自然史博物館の前身であるアシュモリアン博物館が収蔵していたのだが、18世紀に剥製が蛾の幼虫に食べられてぼろぼろになってしまったため、大学副総長の指示で火中に投げられてしまったといわれている。オックスフォード大学自然史博物館には、ミイラ化した頭部と脚などの骨が保管されている。そして、「エドワーズのドードー」を参考に作製された模型と骨格標本が展示されている(図-3)。

ドードーの骨格を初めて復元したのはダーウィンと同時代の解剖学者リチャード・オーエン(1804-1892)だった。1866年に行った復元では、「エドワーズのドードー」を参考に、いかにも鳩胸でずんぐりしたポーズを採用した(図-4a)。ただし、1872年には直立したスリムなポーズに修正した(図-4b)。しかしいったん定着したイメージは簡単には覆せない。図-3の写真にあるドードーの模型は、旧来のうずくまりポーズで復元されている。



図-4 aはオーエンが1866年に復元した骨格。左下のハトの骨格と対照されている。bは1872年の修正図。スリムで直立したポーズになっている。



図-5 シンガポール大学自然史博物館のドーデー展示。最新の復元模型(左)、頭骨レプリカ(右上)、大腿骨と脛骨の実物の半化石(右下)



図-6 1625年ごろに描かれた、羽色が最も正確とされるドーデーの絵。

先日、ラッフルズ博物館に起源をもつシンガポール国立大学自然史博物館を訪れる機会があった。そこでうれしい再会をした。オックスフォード大学自然史博物館が貸し出し中のドーデーの大腿骨と脛骨の半化石(図-5右下)、頭骨のレプリカ(図-5右上)、それと最新研究に基づく復元模型(図-5左)が展示されていたのだ。

照明の関係で模型の色がわかりにくい、「エドワーズのドーデー」で描かれている羽色と異なることはわかるだろう。現在、ドーデーの羽色を最も正確に描いているとされている絵が図-6である。これはインドムガル帝国皇帝ジャハングール(1569-1627)のお抱え画家ウスタード・マンスール(生没年不詳)が1625年頃に皇帝の禽舎で飼われていたドーデーを描いたものとされている。この絵が再発見されたのは1958年のことだった。

照明の関係で模型の色がわかりにくい、「エドワーズのドーデー」で描かれている羽色と異なることはわかるだろう。現在、ドーデーの羽色を最も正確に描いているとされている絵が図-6である。これはインドムガル帝国皇帝ジャハングール(1569-1627)のお抱え画家ウスタード・マンスール(生没年不詳)が1625年頃に皇帝の禽舎で飼われていたドーデーを描いたものとされている。この絵が再発見されたのは1958年のことだった。

ドーデーと運命を共にした木

インド洋上の孤島モーリシャスには、ドーデー以外にもゾウガメなど、固有の動植物が多数生息していた。現在残っている種でも絶滅危惧種に指定されているものがある。ドーデーツリーの通り名で知られているアカテツ科シデロキシロン属の *Sideroxylon grandiflorum* (図-7) もその一つ。モーリシャスを訪れたアメリカの環境保全学者スタンリー・テンブルは、島にはドーデーツリーが13本しか残っておらず、しかもいずれの樹齢も300年を超えているらしいという話を聞いた。この木は果肉に覆われた硬い核をもつ果実をつけるのだが、めったに発芽しない。しかしかつては、ドーデー



図-7 ドーデーツリー(左)とその実(右)

が好んで食べていたという。ドーデーは石を飲み込み、硬い実でも砂嚢で消化して食べていたというのだ。ちなみに、かつてモーリシャスに立ち寄ったオランダの船員たちは、ドーデーを捕まえて塩漬けの保存食にする一方で、ドーデーが飲み込んでいた胃石をナイフの研ぎ石として重宝していたという。

そこでテンブルは、壮大な仮説を立て、1977年にサイエンス誌に発表した。ドーデーは、ドーデーツリーの果肉を好んで食べ、その際に核にまで傷をつけて排泄することで種子散布に一役買っていた。逆にドーデーツリーは、ドーデーに食べられることでますます硬い核を進化させ、互いの依存関係を強化させた。しかし、ドーデーが絶滅したことでドーデーツリーは堅果に傷をつけて発芽の下ごしらえをしてくれる相方を失い、数を減らしてきたというのだ。

この、相思相愛の2種が運命を共にするというロマンチックな物語は一躍注目を浴びた。しかしわずか数年後、この仮説に対する反論が出された。島には樹齢100年以下の木もたくさんあるし、ドーデーとドーデーツリーのかつての生息地はあまり重なっていなかったのではないかというのだ。事実はやぶの中だが、ドーデーはすでにいないことと、ドーデーツリーが絶滅危惧種であることだけはまちがいない。かつて、この2種に接点があったことを示す傍証もある。ドーデーの半化石化した遺骸と一緒にドーデーツリーの実の核が見つかることもあるのだ。さて、真相やいかに。